富士養鱒場だより

第263号
令和8年5月号



静岡県水産･海洋技術研究所富士養鱒場　〒418-0108 富士宮市猪之頭 579-2　TEL:0544-52-0311
E-mail suigi-fuji@pref.shizuoka.lg.jp　URL https://fish-exp.pref.shizuoka.jp/fuji/

（目次）富士養鱒場長・着任挨拶
令和７年のサケ科魚類・海面養殖の生産実態・魚病被害のアンケート調査結果
令和７年度・養鱒研修会が行われました
第 37 回にじます祭が開催されました
転入者紹介・人事異動・令和８年度業務紹介

富士養鱒場長・着任挨拶



このたびの人事異動で、飯田場長の後任として4 月から富士養鱒場長に着任いたしました、鈴木進二（すずき　しんじ）です。富士養鱒場の勤務は今回が２回目になります。1 回目は平成 13～15 年度の３年間で､普及員として現場回りをしつつ、餌料添加物に関する試験や大井川源流域のイワナ調査なども担当しました。当時のニジマスといえば､キャンプ場などで串焼きにして食べる 130g 前後のレギュラーサイズの生産がメインでした。競合するアジ、サバ、イワシなどの海産魚が豊漁になると安価で大量に出回るため、養鱒業界は販売に苦慮していた記憶があります｡しかし時は流れ、近年ではサーモンが回転寿司ネタとして不動の人気 No.1 の地位を占めるようになったり､ご当地サーモンブームで全国各地で大型魚が盛んに生産されたりなど､ニジマス需要は拡大傾向にあります。その流れに乗り、ここ富士宮で着実に生産・販売を伸ばしている大型ニジマス「紅富士」ですが、生産者の安全・安心への取組を県が認証する「しずおか農林水産物認証制度」の認証を受けています。私は県庁の担当として、平成 30～令和３年度に生産現場を毎年訪問し取組状況を伺いましたが、以前とは異なり養鱒業者同士が積極的に連携して生産に取り組む様子には感心させられました。

さて､養鱒業界を取り巻く環境は､近年の餌料･資材価格の上昇傾向に加え中東情勢の悪化による原油供給の不安定化も追い打ちをかけ、一層厳しさを増しており、飼育技術、魚病対策による生残歩留まり向上、餌料コストなど、あらゆる面でこれまで以上に効率化していく必要があります。また内水面漁業では外来魚による放流アユの食害が深刻化しています。

このような状況を受け、当場としましては、成長の優れるニジマスの育種や、マス類種苗生産の宿敵であるミズカビの防除技術、資源循環型のニジマス養殖などの研究に取り組みます。また「紅富士」については引き続き生産･出荷体制について助言を行うとともに、国際水準 GAP に対応した県

の新たな認証制度「しずおか農林水産物 GAP 認証制度」への円滑な移行を支援します。さらに、沼津地区を中心とする海面養殖業の魚病対策、そして内水面漁業におけるコクチバスの駆除活動に対する支援などを継続して行っていきます。

現場の皆さんの意見を伺いながら、課題解決に向けて職員一同、力を合わせて取り組んでいきますので、今後ともよろしくお願いいたします。

（場長　鈴木進二）

令和7年のサケ科魚類・海面養殖の生産実態・魚病被害のアンケート調査結果

静岡県内のサケ科魚類及び海産魚の養殖業者の方々に御協力いただいた令和７年の生産実態及び魚病被害のアンケート調査結果を取りまとめましたので、概要を報告します。

方　法

県内でサケ科魚類及び海産魚の養殖業を営む経営体を対象にアンケートを配付し、各魚種の生産量と生産額、魚種別及び疾病別の魚病被害量と被害額を調査しました。本調査の対象期間は令和７年１月１日～12 月 31 日の１年間です。

結　果

１　サケ科魚類（表１）

(1)経営体数：延べ経営体数は前年から２軒減少して 47 軒、実経営体数も２軒減少して 27 軒でした。

(2)生産量：生産量は 1,283 トンで、前年比 85%となりました。魚種別にみると、ニジマスは 1,222 トンで前年比 86%、アマゴは 41 トンで同 66%、イワナは６トンで同 43%、ギンザケは３トンで同 86%と、「その他」以外は前年を下回りました。

(3)魚病被害状況：魚病被害量は 87 トンと前年比 275%となり、大幅な増加となりました。

魚種別にみると、ニジマスが 77 トンと最も多く、生産量の６%を占めました。ニジマスでは、一部の経営体でレンサ球菌症による大きな被害が発生し、混合感染も含めると 51 トンもの被害となり、これはニジマス被害量全体の 66%に相当します。また、被害に遭っている魚の多くは全雌三倍体の大型魚で、金額的にも非常に大きな被害となります。眼球突出、体表の発赤、腹腔内の炎症など、レンサ球菌症と思われる症状が見られた場合は、早めに当場へ御連絡いただくと共に、投薬等による適切な治療を御検討ください。レンサ球菌症以外では、これまでと同じく IHN、細菌性冷水病の被害が多くありました。ニジマス以外では、アマゴとイワナではせっそう病が多く、アマゴでは不明も多くありました。

２　海産魚（表２）

(1)経営体数：延べ経営体数は前年から１軒減少して 28 軒、実経営体数は前年と同数の 14 軒でした。

(2)生産量：生産量は 2,175 トンで、前年比では 113%となりました。魚種別にみると、マアジは 209 トンで前年比 90%と減少しましたが、マダイは 1,735 トンで同 118%、ブリは 200 トンで同 105%、シマアジは 7 トンで同 117%と前年を上回りました。

(3)魚病被害状況：魚病被害量は 66 トンで、前年比 56%と大きく減少しました。

魚種別にみると、マダイが 38 トンと最も多く、生産量の２%を占めていました。疾病別ではエドワジエラ症が最も多く、混合感染も含めると 38 トンがエドワジエラ症で、被害量全体の 98%を占めていました。レンサ球菌症は 25 トンで同 66%でした。

マアジは 24 トンとなり生産量の 11%となり、疾病別ではレンサ球菌症が 21 トンで被害量全体の 88%、ビブリオ病が 17 トンで同 70%となりました。

その他の魚種では、シマアジで４トンとなり生産量の 50%と大きな被害となりました。なお、表２ではブリの被害量が０トンとなっていますが、実際には 0.1 トンの被害があり、生産量の 0.05%を占めていました。

なお、本アンケート結果の詳細は、静岡県水産・海洋技術研究所「令和７年度事業報告」に掲載します。（青島秀治）

表１　サケ科魚類のアンケート調査結果

魚種	R7 経営体数（軒）	R7 生産量（トン）	R7 魚病 被害量（トン）	R7 魚病 生産量に対する割合（%）	R7 魚病 主な疾病	（参考）R6 経営体数*（軒）	（参考）R6 生産量（トン）	（参考）R6 魚病被害量（トン）
ニジマス	18	1,222	77	6	IHN、冷水病、レンサ球菌症	20	1,413	22
ギンザケ	1	3	0	0		1	4	0
アマゴ	17	41	10	24	せっそう病、不明	17	62	8
イワナ	5	6	0	5	せっそう病	5	14	1
その他	6	11	0	0		6	11	0
合計	47(27)*	1,283	87	7		49(29)	1,503	32

＊カッコ内は実経営体数

表２　海産魚のアンケート調査結果

魚種	R7 経営体数（軒）	R7 生産量（トン）	R7 魚病 被害量（トン）	R7 魚病 生産量に対する割合（%）	R7 魚病 主な疾病	（参考）R6 経営体数*（軒）	（参考）R6 生産量（トン）	（参考）R6 魚病被害量（トン）
マアジ	6	209	24	11	レンサ球菌症（α Ⅰ、Ⅲ）、ビブリオ病	7	234	39
マダイ	9	1,735	38	2	エドワジエラ症、レンサ球菌症（β）	10	1,466	77
ブリ	2	200	0	0		2	190	1
シマアジ	1	7	4	50	レンサ球菌症（α Ⅲ）	1	6	2
海面その他	3	15	0	0		2	10	0
陸上ヒラメ	2	4	0	0		2	15	0
陸上その他	5	5	0	0		5	4	0
合計	28(14)*	2,175	66	3		29(14)	1,924	118

＊カッコ内は実経営体数

トピックス

令和７年度・養鱒研修会が行われました

令和７年12月５日に当場主催の養鱒業者向け研修会「養鱒研修会」を富士養鱒漁業協同組合で開催しました。今回の研修会では、養鱒現場を回る中で生産者からの要望が多かった「鳥害対策」をメインテーマに据えて、静岡県の水産・海洋局水産資源課の日吉菜々子主事と山梨県水産技術センターの三浦正之主任研究員から、両県で行われている鳥害対策の事例紹介をしていただきました。

日吉主事からの事例紹介では、カワウによる鳥害対策としてドローンによるねぐらへのひも張り（繁殖地除去）や、卵にドライアイスをかけることで孵化させないこと（繁殖抑制）が有効であると説明がありました。一方、銃器による駆除はカワウの個体数を減らすことはできるが、無計画な銃器駆除はカワウが散ってしまい、かえって行動範囲や被害地点を広げてしまう恐れがあることがわかりました。

三浦主任研究員からは、カワウとサギによる鳥害対策の事例紹介がありました。カワウによる鳥害対策では、静岡県と似た繁殖地除去や繁殖抑制によって、近年は個体数が減少気味であることから、本県でも現在の対策を続けていくことが重要であることがわかりました。また、サギによる鳥害対策では、池に黒色の防鳥糸を張ることが有効であると御教示いただきました。本県でも防鳥糸



養鱒研修会の様子

による鳥害対策は行われていますが、鳥が防鳥糸に慣れてしまうと効果が減少することが課題でした。しかし、視認できない黒色の防鳥糸を用いることで、慣れにくく、効果を維持できるとのことでした。黒糸の防鳥糸による鳥害対策は本県でも効果が期待できるので、現場導入を見据えて、黒糸の種類の選定や出荷等の池での作業を妨げない張り方について検討したいと思います。

年末のお忙しい中、快く講師を引き受けていただいた日吉主事と三浦主任研究員には、この場をお借りして御礼申し上げます。　　（永倉靖大）

第 37 回にじます祭が開催されました

令和８年３月１日、「第 37 回にじます祭」が富士山浅間大社に隣接する神田川ふれあい広場にて開催されました。本イベントは富士養鱒漁業協同組合を中心とした市内関係者が主体となり、例年３月の第一日曜日に開催されています。当日は天気にも恵まれ、富士山を望む中、県内外の多くの人で賑わいました。

祭ではニジマスを使用した料理や加工品の販売のほか、たくさんの屋台が並びました。屋台の出店だけではなく、にじます音頭やじゃんけん大会等のステージイベント、さらにニジマス放流会やニジマスの重量当てクイズといった多彩なイベントも行われました。重量当てクイズは、これまでは水槽で泳いでいるニジマスの重量を自分で予想するものでしたが、今年は六択になったことでより気軽に参加できたのではないでしょうか。

また、祭の中では、富士養鱒漁業協同組合が開発したにじます魚醤が紹介されました。本商品は、富士宮の特産品であるニジマスを、もっと気軽に料理に利用してほしいという想いから開発された新商品です。当日は漁協のブースで販売されていた他、会場近くの富士宮やきそばのアンテナショップでは、にじます魚醤を使った富士宮やきそばが販売されていました。

様々な屋台の出店や各種イベントの開催、新商品のお披露目等、大変充実した祭となり、来場した皆さんも大いに楽しんでいるようでした。にじます祭は来年も同時期に開催予定ですので、楽しみにお待ちください。　　（永倉靖大）





第 37 回にじます祭の様子

転入者・自己紹介



４月から富士養鱒場の普及指導員として着任した青島秀治（あおしま しゅうじ）です。

当場には新規採用で昭和 63 年度から平成 2 年度まで勤務し、その後、8～11 年度、14～17 年度と計 3 回、通算 11 年在籍していました。それから 20 年以上が経過し、自分も年をとりましたが、業界の状況も当時とは大きく変わったと感じています。今回も主に魚病検査などの魚類防疫関係を担当していくので、よろしくお願いします。

このたび富士土木事務所から総務担当として異動してきました秋山幸生（あきやま　ゆきお）です。生物を扱う職場での勤務は初めてのため、日々、新鮮さと知識不足を痛感しております。

鱒については、「美味しい」ということ以外の知識がなく、大変勉強不足を感じておりますが、これから一つ一つ学びながら業務に取り組んでいきたいと思います。

どうぞよろしくお願いいたします。

人事異動

（令和８年４月１日付け）

（転出）	場長	飯田益生	→	漁業高等学園　学園長
	主査	渡辺智明	→	東部健康福祉センター　主査
	主任	冨山皓介	→	水産振興課　主任
（転入）	場長	鈴木進二	←	開発加工科　科長
	主幹	青島秀治	←	深層水科　科長
	主査	秋山幸生	←	富士土木事務所　主査

令和8年度　業務紹介

職		氏名	主な担当業務
場長		鈴木進二	富士養鱒場業務の総括、全国協議会
総務	主査	秋山幸生	予算・庶務、観覧業務、庁舎等の保守管理
研究科	主任研究員	髙田伸二	試験研究の企画調整 試験研究（新品種開発）
	研究員	安藤大輝	試験研究（魚病）
普及班	主幹 （普及指導員）	青島秀治	普及指導（魚類防疫対策、内水面漁業、 生産業務指導）
	主任 （普及指導員）	永倉靖大	普及指導の企画調整、広報 普及指導（地域水産業の振興）
会計年度採用職員		植松久男	試験研究補助、飼育管理、場内管理
会計年度採用職員		望月克敏	試験研究補助、飼育管理、場内管理

富士養鱒場の降水量と湧水量

月	降水量（降水日数）：mm（日）		湧水量：万トン/日		月	降水量（降水日数）：mm（日）		湧水量：万トン/日	
	今年	過去平均*	今年	過去平均*		今年	過去平均*	今年	過去平均*
11	31(5)	122(7)	4.36	6.08	2	70(7)	111(9)	1.47	2.78
12	96(6)	89(6)	2.55	4.57	3	172(14)	220(11)	1.16	3.24
1	0(0)	52(5)	2.24	3.40	4	297(13)	259(11)	3.18	4.17

＊ 前年以前の 20 年間平均値

日　誌

令和７年 11 月	令和７年 12 月	令和８年１月
毎週水曜　沼津駐在 ５日 バイテク魚作出指導（場内） ５日 業務連絡会分場長会議(Web) 12 日 水産研究発表会（焼津） 14 日 漁業者交流大会（焼津） 16 日 和食展（静岡） 17 日 研報編集委員会（Web） 20 日 普及月例会・浜松市場視察（浜松） 25 日 しずおか GAP 認証 WG（Web） 26 日 バイテク魚作出指導（場内） 27 日 しずおか認証定期監査（市内） 28 日 富士宮市地食健身食育推進事業(市内) 28 日 投薬マニュアル打合せ（Web）	２日 富士宮市地食健身食育推進事業(市内) ２日 魚類防疫士連絡協議会東海北陸ブロック研修会（Web） ３日 バイテク魚作出指導（場内） ４日 業務連絡会分場長会議(Web) ４日 富士宮市地食健身食育推進事業(市内) ５日 富士宮市地食健身食育推進事業(市内) ５日 養鱒研修会（市内） 10-11日　魚病症例研究会（三重） 12日 紅富士麻酔選別作業（市内） 17 日 県かん水協会役員会（沼津） 18 日 普及月例会（焼津） 18-19 日 薬剤耐性に関する技術研修会（東京） 19 日 GAP 担当者会議（Web） 19 日 紅富士革新プロジェクト（市内） 23 日 バイテク魚作出指導（場内） 25 日 投薬マニュアル打合せ（Web） 26 日 しずおか GAP 認証 WG（Web）	９日 業務連絡会分場長会議（Web） 16 日 投薬マニュアル打合せ（Web） 20 日 にじます祭実行委員会（市内） 26 日 投薬マニュアル打合せ（Web） 27 日 水産業未来づくりプラットフォーム検討会（Web） 29 日 水産振興審議会（Web）
令和８年２月	**令和８年３月**	**令和８年４月**
２日 一般研究中間・事後評価（Web） ４日 業務連絡会分場長会議(Web) ５日 育て鱒タ一卵配布（市内） 5-6 日 アユ資源研究部会（Web） ６日 漁業士会総会（伊東） ６日 日本学術会議シンポジウム（Web） ９日 養鱒協運営委員会（東京） 12日 紅富士麻酔選別作業（場内） 13日 投薬マニュアル打合せ(Web) 25日 普及月例会（焼津） 27日 技術連絡協議会（焼津）	１日 にじます祭（市内） ５日 業務連絡会分場長会議(Web) ６日 全国養殖衛生管理推進会議（Web） 7-8 日 魚病学会（東京） ９日 普及課題設定協議会（Web） 11 日 内浦湾採泥調査（沼津） 16 日 魚病対策委員会（静岡） 17 日 にじます祭実行委員会（市内） 19 日 水産業普及指導員研修会（東京） 27 日 紅富士革新プロジェクト（市内）	３日 業務連絡会分場長会議（焼津） 10 日 東部危機管理連絡会議（Web） 16 日 普及月例会（焼津） 17 日 県かん水協会役員会（沼津） 21 日 岳水協合同会議（富士） 23 日 水産事業概要説明会（Web） 28 日 GAP 担当者会議（web）
＜視察見学対応＞ 11/27 三島市立南小（79 名）,12/10 焼津水産高校栽培漁業科（39 名）、12/13 水研日光庁舎（３名）、1/20-21 栃木水試（２名）		